

豊浦寺の調査

—第181-8次

1 はじめに

今回の調査は、向原寺の門の建て替え・トイレ増築・石碑改修にともなうものである。向原寺は、豊浦寺の旧境内地に立地しており、奈良文化財研究所や奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会の調査により、良好に遺構が残存していることが確認されている。門の工事予定地は講堂基壇の東端がかかる可能性があったが、工事深度がそれほど深くはないため、当初は立会調査で対応した。しかし、工事開始後に、掘削深度が遺構残存高より低くなる恐れが出てきたため、発掘調査に切り替えた。

調査は、工事予定地を中心に、旧階段の下にあたる部分の全面を掘削しておこなった。調査区は、東西5.2m×南北5.2mであり、危険防止のため東側三分の一は上面で掘削を終えている。遺構検出後、下層確認のための断割（幅0.3m）を調査区内の2カ所でおこなっており、北壁際断割・中央断割と称している。

なお、トイレおよび石碑部分に関しては、立会調査により、工事部分で遺構上面を検出したが、掘削がそれ以上およばないことが確認されたので、遺構面を保護した上で工事を続行した。

2 調査概要

基本層序

遺構面の上はすべて造成土であり、大きくは上から1：現代、2：近代以降、3：江戸時代以降の3層にわかれる。これらを除去すると、豊浦寺・向原寺関連の遺構が広がる状況である。

遺構

遺構で最初に確認されたのは基壇土および石垣状遺構SX465である。断割によって、基壇土の下層は古代に遡ることが確認された。基壇土の下からは下層の石列SX466・石敷SX467を検出した。

石列SX466 中央断割において、長辺20cm×短辺10cm程度の石4つを直線状に並べた遺構を検出した。当時の地表と考えられる黒褐色砂質土（遺物含む）の上に、褐色

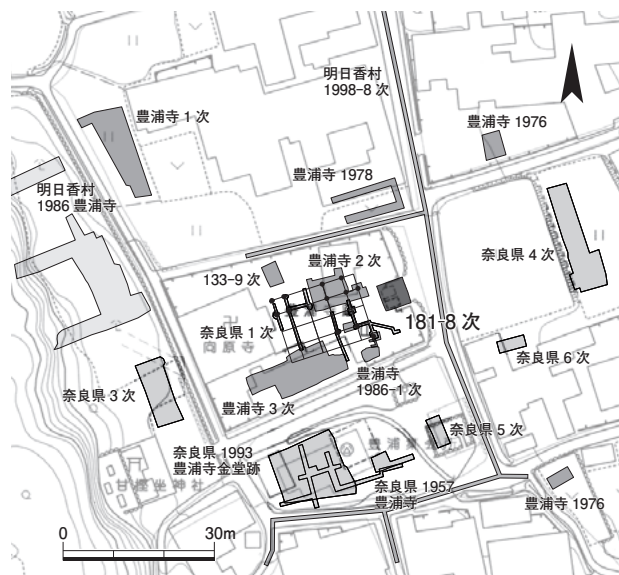


図165 第181-8次調査位置図 1 : 1500

砂質土を敷くことで石を固定している。石列は、調査区内の4石だけでは正確な測定は難しいが、座標の西に対して30度ほど南に振れている。第3次調査（『藤原概報 16』）の豊浦寺下層遺構に振り幅が近く、第133-9次調査（『紀要 2005』）の遺構面と標高が揃うことからみても、同じ下層遺構の一連の構造物であると判断した。

石敷SX467 中央断割および北壁際断割において、径5cm程度の小石を敷き詰めた遺構を検出した。砂質土（遺物含む）の上に砂質土を敷き、石を固定した遺構である。石列SX466と若干の空間を挟み、北側に位置する。石列と同じ面で、褐色砂質土を敷いて石を固定していることから、同時期の所産であると判断した。第133-9次調査で検出したバラス敷と一連のものであろう。

基壇関連 下層の石敷および石列の上に、灰黄褐色・褐色の砂質土の人為的堆積がある。断面で観察したところでは0.3m程度の厚さである。豊浦寺の講堂基壇の一部をなすと考えられるが、第133-9次調査と異なり版築によって固められているわけではない。また、この調査区内では、第3次調査で検出した石列SX404のような、区画施設も見つけていない。推定地より東側でもあり、基壇そのものないしは周辺の整地土の両方の可能性がある。

なお、豊浦寺講堂基壇は中世以降に再利用されていることが、第2次調査（『藤原概報 11』）で判明している。今次調査区においても、古代の土の上に中世以降の人為

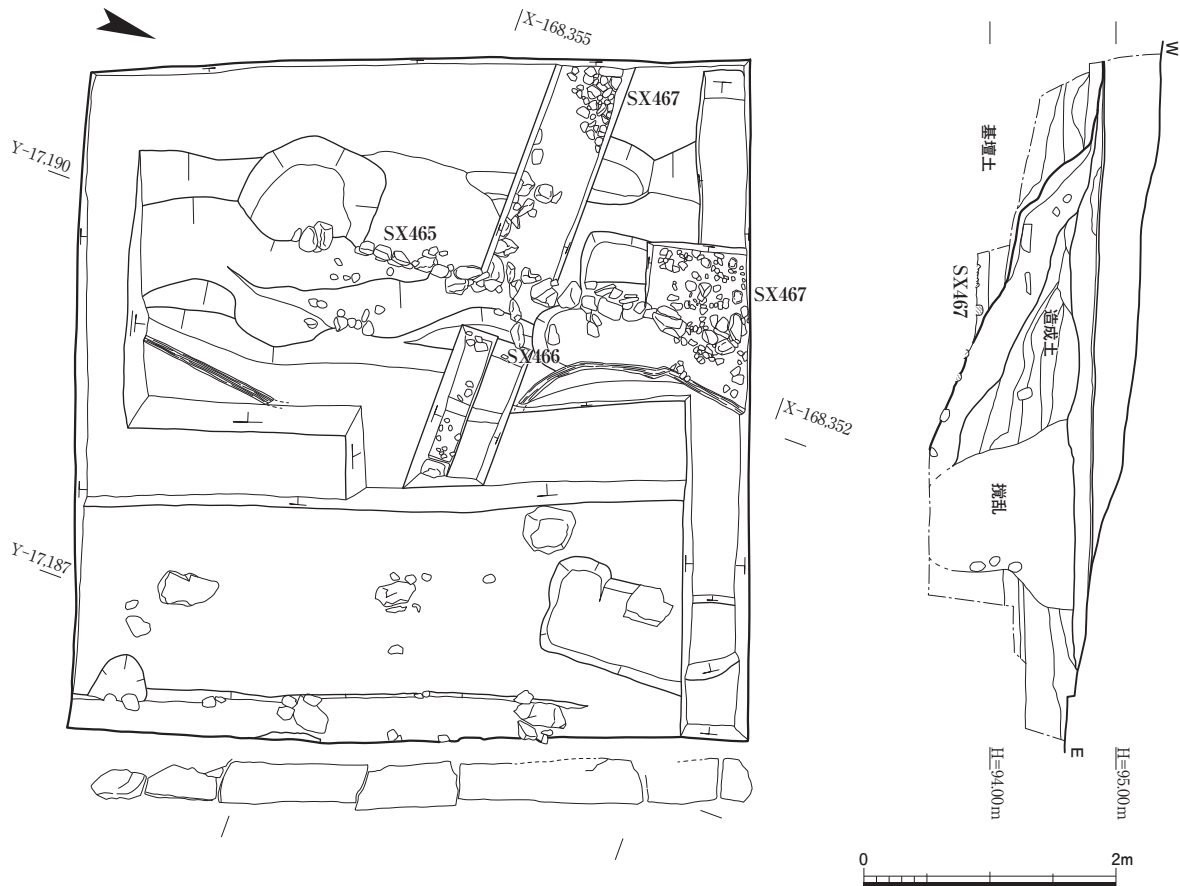


図166 第181-8次調査遺構図・土層図 1 : 60

的盛土が認められる。おおよそ0.35m分が残存しており、上下2層にわかれている（下約0.25m、上約0.1m）。第2次調査で確認された上層基壇土に相当すると考えられる。

石垣状遺構SX465 長辺10~15cmの石を中心として、東に面をなして、2段に積み上げている。基壇土の上に、礫混じりの砂質土を置いて、石積が構築されている。残存しているのは、南北幅1m、高さ0.1~0.15m分であり、方位は座標の北に対して7~8度西に振れている。豊浦寺講堂の基壇を利用している一方、陶磁器・瓦を含む堆積に覆われていることや、方位が第2・3次調査で確認されている豊浦寺講堂および後身の建造物の方位とは異なっていることから、現向原寺が浄土真宗の寺院となった江戸時代以降の構築物であると考えられる。

3 出土遺物

調査地内では、土師器・須恵器・陶磁器類が少量と、瓦がコンテナで42箱分出土している。瓦は、豊浦寺講堂および後身の建造物、さらには向原寺の門・塀にともの

うものであり、古代・中世・近世の丸平瓦と近代・現代の棧瓦など各時代のものが含まれている。

4 まとめ

今次調査における遺構の変遷は、以下のようにまとめることができる。

- 第1段階：石列SX466・石敷SX467の構築(古代。豊浦宮か。第3次調査および第133-9次調査下層相当)。
- 第2段階：豊浦寺の講堂基壇。(古代。第2次調査下層および第3次・第133-9次調査上層相当)
- 第3段階：豊浦寺講堂基壇を利用し、新しく堂が作られる。(中世。第2次調査上層相当)
- 第4段階：石垣状遺構SX465構築。(近世)
- 第5段階：門。(近代。昭和25年ごろまで使用。)
- 第6段階：門再建。(昭和25年ごろ。平成26年まで使用。)

今回の調査でも、豊浦寺および下層の遺構が良好に残存していることが確認された。豊浦寺の伽藍復元の一助となる成果であるといえる。(南部裕樹/東大寺・桑田訓也)



図167 第181-8次調査区全景（東から）



図169 下層石敷SX467検出状況（東から）



図170 下層石敷SX467検出状況（東から）



図168 第181-8次下層断割状況（東から）

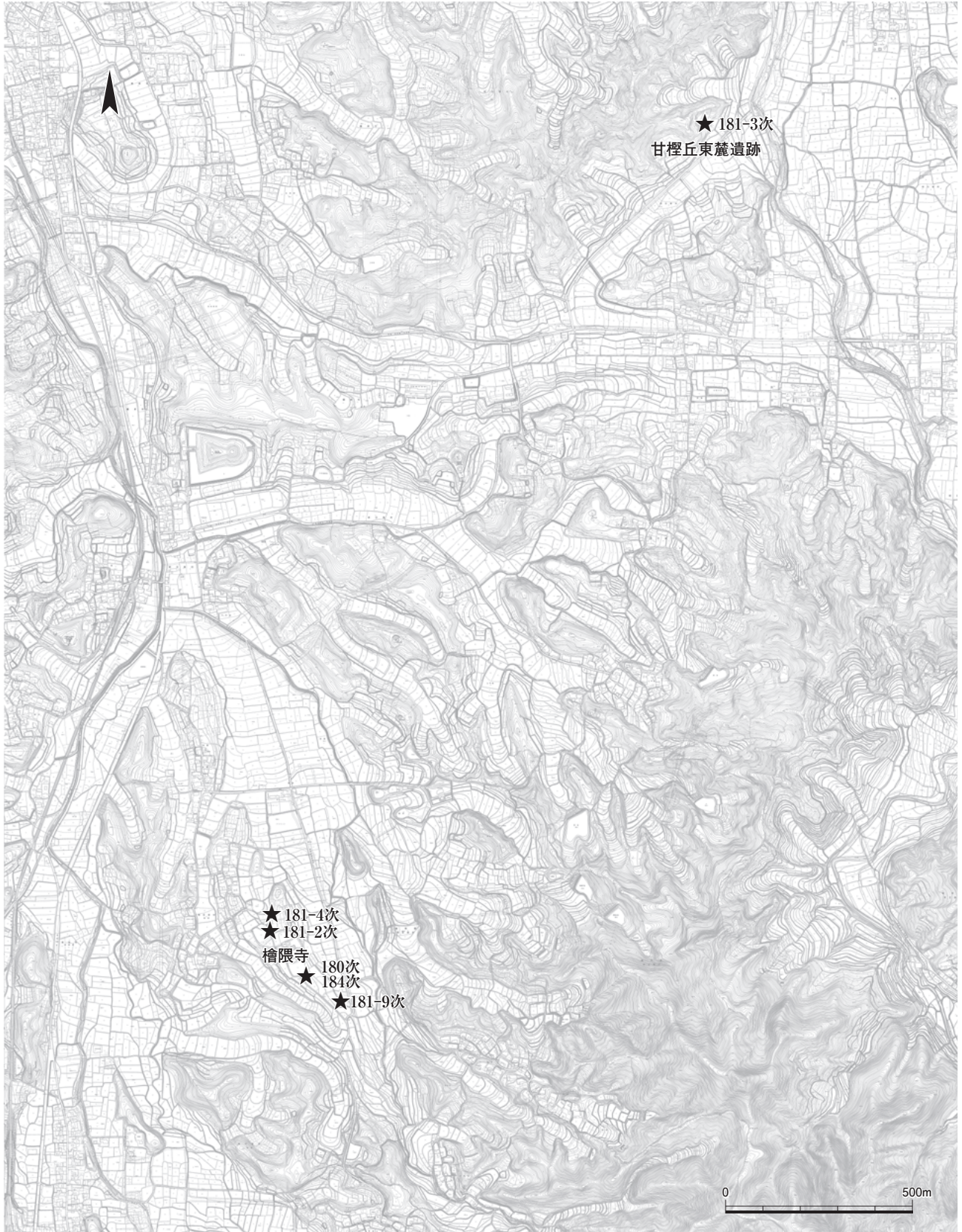


図171 檜隈寺周辺の地形図 1 : 15000